

♪ 2019年度 *poco a poco* ♪

Nr. 3 2019年5月9日(木) 文責:プファイル・辰巳

春はどこへ?

5月に入ったというのに、寒い日が続いています。春はどこへ影を潜めてしまったのでしょうか? それでも、小学部の遠足の日は、晴れてよかったですね。運動会や合宿の日なども、お天気に恵まれるよう、祈っています。

さて、日本は令和時代に入りました。日本の友人曰く、「5月1日はお正月のような雰囲気だった。」そうです。確かにNHKワールドテレビを見ていたら、東京都心あたりでは、カウントダウンなどして、新時代をお祝いしている人が映っていました。なんだか「ゆく年くる年」を見ているような気分になりました。この新しい時代を築き上げるのは、今本校で学んでいるような子どもたちなんだなあ、とも思いました。日本だけではなく、世界中に平和が実現され、みんなが暮らしやすい社会になるといいなあ、と願っています。



いよいよ連載最終回! 最後はやはり大好きなブラームスさんに登場してもらいます。

<作曲家のこの一曲 ㊤最終回 ヨハネス・ブラームス

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第1番

ト長調 作品78「雨の歌」>

バッハ、ベートーヴェンに続く「ドイツ三大B」に数えられる作曲家は、ヨハネス・ブラームスです。1833年にハンブルグで生まれました。お父さんも市民劇場のコントラバス奏者だったそうです。しかし、家庭は貧しく、ピアノが得意だったヨハネス少年は、13歳ころから、居酒屋などで演奏をして、家計を助けていたそうです。

そのころからすでに作曲の勉強も始め、作品を作り出してはいた様子ですが、とにかく自己批判が厳しい性格だったらしく、作曲しては、片っ端から気にいらぬ曲を廃棄してしまったそうです。ですから、青少年時代の作品は、ほとんど現存していないのだそ

うです。内省的で熟考に熟考を重ねて納得するまで作曲に取り組むブラームスの性格をよく表しているエピソードです。

そんなブラームスに1853年、20歳の時、人生の大きな転機が訪れます。作曲家シューマンとの出会いです。

シューマンはブラームスの作品を一目見て、その才能に大いに感銘を受けたそうです。そして、自分で編集に携わっていた音楽雑誌でこの若き作曲家を紹介し、世に出しました。ブラームスとシューマン家の付き合いは、それ以降、親密に続き、夫のロベルト・シューマンが亡くなった後も、妻のクララ・シューマンや子どもたちとの付き合いは続きました。生涯家族を作らず、独身で通したブラームスにとっては、シューマン家は心の支えであったと言えるでしょう。



さて、そのブラームスの作品ですが、4曲の交響曲を始め、数多くのドイツ歌曲や室内楽、またピアノの小品集など美しい曲がたくさんあります。1つだけを選ぶのは大変難しいのですが、この曲を選びました。「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」第1番です。ブラームスがつけたわけではありませんが、俗称「雨の歌」です。歌曲「雨の歌」の主題を使って、ヴァイオリン曲に仕上げたからだそうです。

私がブラームスの音楽を好むのは、彼の曲が、私の抱えている「ドイツ的なイメージ」にピッタリくるからかも知れません。浮ついたところがなく、どっしりと地に足がついた感じとでも言いましょうか。しとしとと雨が降る日に、窓辺に佇んでブラームスの「雨の歌」を聞いてみてください。しっとり、心の中まで潤ってくるような気持ちになります。古いところではアシュケナージのピアノとパールマンのヴァイオリンによる演奏。新しいところでは、バレンボイムのピアノとズッカーマンのヴァイオリンによる演奏などがお勧めです。

ちょっとだけ 演奏会情報

~6月のパバゲーノ劇場(パルメンガルテン内)の演目より~

「小さな魔笛」(モーツァルト「魔笛」縮小版)

6月2日(日)16時、7日(金)16時、8日(土)16時、
23日(日)16時、28日(金)16時、29日(土)16時

「いばら姫」

6月9日(日)16時、10日(月)16時、
14日(金)16時、15日(土)16時